

俺はみほエリをなせず敗北しました

アーマードコアの新作

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おまけにするにもおこがましいものを書き出しては捨てる処分場。見てもいいけれど、精神の安全は保証し兼ねます。

目次

ゆかエミif	1
ゆかエミif 2	10
ノンナとエミーリヤ、カチユーシヤ	18
エリカとエミ	25
アンチヨビ地獄	30
プラウダのとある一日	36
『 』	44
雨の語らい	52
泥の一幕	58
西住の母	61
おもいノンナ	68

ゆかエミif

朝の目覚めを迎えたら、最初に私は歯を磨くことにしている。

歯はとても大切だ、手入れを怠れば虫歯になるし、歯周病にも陥りやすい。

だけど何よりも、口臭や歯の黄ばみといった女としては耐えがたい汚点を生み出しかねない。

もし口が臭いなんて彼女に言われてしまったら、一ヶ月は立ち直れない自信がある。

だから私は、歯磨きを怠らない。

「いーっ」

歯を噛み合わせて、鏡に映す。

間抜けな顔なのであまり人前では見せたくない。

そのあとはしっかりと口の中をゆすいで、牛乳を一杯飲み干す。

それらの工程を全て終わるのには十五分ほどの時間を要する。

「……さて」

あとは顔を洗って、軽く乳液と化粧水を塗る。

そしたらいよいよ支度は完了だ。

私は自分の寝室へと足を向ける。

つい先ほどまで私が寝ていた部屋に戻ると、部屋の中心のやや大きなベッドの上に、子供ほどの小さなふくらみが出来上がっている。

「えへへ」

そんな姿を見ただけで笑みがこぼれてしまうからだいぶ重症だと思ふ。

足音を立てないように近づいてから、そつとその体を揺さぶる、

「朝ですよ、起きてください」

「……ふあー」

魂が抜け切ってるような返事だ、こればかりは何度聞いても面白い。

高校にいた頃はむしろ相当な早起きだったはずなのに、一緒に暮らし始めてからみるみるうちに朝に弱くなってしまった。

だから今彼女を起こすのは私の役目。
でも、役得ばかりなので全然嫌ではない。

「……エーミさんっ起きましようー！」
「ふわっ」

布団を一気に捲り上げた。

するとその下に隠れていたのは、胎児のように体を丸めてぐっすりと眠り込んでいるエミさんの姿。

眩しそうに瞼を強く瞑っているから顔に両手を添えて撫で回してあげる。

相変わらず幼稚園児のようなハリとモチモチさに、少しだけ妬いてしまう。

「ほらほらエミさん、朝ですよ〜」

「むわ、わう、やめれ〜起きる起きる」

流星に顔を弄られては睡魔も逃げたか、彼女は呻きながらも気だるそうに瞼を開く。

その下から餡色の瞳がそっと覗けたのを見て、改めて、少しよこしまな情が湧いてくる。

「……おはようございます、エミさん」

なので、いたずら気分でおでこに唇を当ててみる。

「……はぐっ」

「ああ、エミさん!？」

そしたら彼女はばたんきゅーしてしまった。

私が言うのもおかしい話だが、彼女はいつまでたっても初心すぎると思う。

「はい、べーぞ」

「ありがとうございます」

差し出されたマグカップの熱を手のひらに受ける。

この寒い時期にこの暖かさはどうだろう、手のひらの先をじんわり蕩かすように、ぬくもりが広がっていく。

ミルクを少し混ぜて温くしたコーヒーの温度を指先で味わいなが

ら、そつと一口含む。

「これだ、朝はエミさんのコーヒーを飲まなきゃ始まらない。」

「今日はどこかにいく予定はありますか?」

「なかったと思う。緊急で要件ができるかもしれないけれど、それでもなければ久しぶりに家でゆっくりしようかな」

「そしたら、今日は2人で寛げますね」

「う、うん……」

赤くなつてうつむいた姿が可愛らしくて、思わずカップを握っていた手を伸ばして、彼女の小さな手を包み込む。

あつたかくて柔らかい手。

この感触を存分に堪能できるのは私だけの特権だ。

「テレビとか見ながら、のんびりしましょう」

「はい……」

「それじゃあ早速……の前に、朝ごはんを食べないと」

残ったコーヒーを飲み干して、キッチンへと向かう。

朝の食事は1日を元気に過ごすために大変重要だ。

エプロンを手早く巻いて冷蔵庫を覗きこむ。

エミさんは好き嫌いがないから、栄養バランスだけ気をつければいい。

スクランブルエッグと、後は適当なサラダにトーストでも焼こう。

そうと決めた私は早速フライパンを火にかける……

「手伝うよ」

「大丈夫、今日は私にやらせてください」

「そう?」

席を立とうとしたエミさんを、私は止めた。

彼女にも秘密なのだが、こうして彼女のために食事を用意するのが、私は好きなのだ。

彼女の口に入り、彼女の血肉となるものを自分の手で作り出す。

それがどういうわけか、堪らなく好きなのだ。

「ふんふん……来週の試合は荒れそうですね」

「……」

朝食を終えた後は、2人で揃ってテレビを見ることにした。
ソファの上に座って、のんびりとテレビを見る。

(最近は、こういうのなかったなあ)

近頃は取材やら試合やらでバタバタしていて、休日も予定が立て込んでなかなか気も体も休まらなかった。

なのでこんなダラダラとした時間を過ごすのは本当に久しぶりだ。

「ねえ、優花里さんや」

「はいはいなんでしよう」

「この抱え方に意味はあるのかい？」

そう言つて不満げに睨んでくる姿を見て、また笑いがこぼれてしま
う。

ソファに座りこんだ私に人形のように抱きかかえられているのが
不満なようだ。

「いやですか？」

「優花里さんには子ども扱いはされたくない」

むすつとそんなことを言われて、私は胸のときめきが抑えられな
かった。

この『優花里さんには』つてところがポイントだと思う。

私からは対等に見て欲しいという欲求だと思つと、たまらなく可愛
らしい。

「大丈夫です、子ども扱いなんかしてません」

「本当？」

「これが一番密着できるじゃないですか」

「……はい」

真つ赤になつて、俯きながらか細い声で返事をする姿があまりにも
愛らしくて、私はエミさんのお腹に回した腕でぎゅつとその小さな体
を抱き寄せた。

「ちよ、ちよつと……」

抗議の声を無視してつむじに押し付けた鼻から匂いを嗅ぐ。

自分と同じシャンプーの香り。

そのまま抱きしめた体をそつと撫でたりすると、くすぐったそうな声が漏れ出し始める。

「エミさん、イヤなら、言ってください」

「や、その」

「言ってくれば止めます、止めますから……」

そのままモジモジと身じろぎするのを押さえ込んで、肺の中を彼女の香りで満たして、指先で肌のみずみずしさを堪能する。

支配欲求が満たされていき、みるみるうちに興奮が増していく。

そのままロクに抵抗もしないエミさんの首筋を指でなぞりながら、少し意地悪な問いを試してみた。

「……嫌だとは、言わないんですね。いいんですか？ このまま抵抗しなくて」

「……」

そんなことを言ってみると、真っ赤な顔を少し歪めながら、エミさんは私の手にそつと手のひらを重ねてきた。

「……その、むしろ嬉しいから、あの……」

「~~~~~!!」

卑怯だ、なんだかんだでいつもこうして彼女の方から私の劣情を煽るのだから！

「エミさんっ」

「はむっ——！」

そのまま、強引に振り向かせてキスをした。

手首を握って、頭を抱えて逃げられないようにしてから、彼女の唇を食み、舌をからめ合わせる。

弱々しくも彼女の方から舌を押し付けられるのを感じてますます気分が高揚し、そのまま体勢を入れ替えて彼女をソファに押し倒す。

指と指を絡め合わせながら、テレビの雑音をBGMに私たちはしばらくの間体をすり合わせあって濃厚な口づけを交わすのだった。

「……」

「……」

お昼、私たちは気まずい空気の中で昼食を味わっていた。

エミさんの作ったスパゲティはなかなかの味だ。

こんな可愛いらしい見た目でありながら彼女は妙に豪快な男飯を作る傾向がある。

今撮ってるペペロンチーノも大火力で材料を炒めて手早く仕上げた代物だ。

少し焦げてるのは、ご愛嬌。

(朝早くから盛りすぎました……)

そう、気まずさの原因はそれだった。

まだ朝のニュースを流している最中に服がしわくちやになってしまっただけにサカリアあつてしまったのだ。

特に私は自分から仕掛けた側である以上かなりの圧を感じてしまう。

そんな空気の中モサモサと麺を処理していると、一足早く食べ終わったエミさんが立ち上がって、歯ブラシを手取るのが見えた。

「午後は、まあ、その、もう少し健全に過ごそう」

「は、はい」

そう言っただけで笑う彼女に、とりあえず返事しておいた。

確かに、せつかくの2人揃ったの休日をイチャつくだけで終わらせてしまうのも……悪くはない、のだけれど。

どうせならもっと他のことをして過ごしたい、というのはある。

しかしそうなるとうしろ、いざこうなると、何をしてもいいのかわからない。

テレビを見て過ごす……だめだ、なんだか二の舞を踏みそうな気がする。

買い物にでも行くのか……家で過ごすか……と決めた以上今更その意思を曲げるのもなんだか悔しい。

2人一緒にいるのだから同じことをしたいのだが、何かいい案は……

「デュエルでもする?」

「却下で」

「……ゲーム機なんてうちにはないしな」

「やっぱり、どこかに出かけたりしますかねえ」

家にいると案外やることがないものだなあとはい知る。

家で過ごすことに固執して退屈な時間を過ごすのは本末転倒だ、こ
こは仕方がないので服でも買いに行こうか……

「あ、そうだ、あれがある」

「？」

と、決意を固めかけたところでエミさんはぼんと手を叩いて二階へ
と上がっていった。

はて、なんだろう。

さほど待たず、パタパタと降る音が聞こえてきて、すぐに戻ってき
たエミさん。

手には、一本のボトルが握られていた。

「この間いいワインをもらったんだった。

せっかくだし、飲んでみようか」

「……昼間からお酒ですか？」

「なあに、世間一般では珍しくもないさ」

そう言っているうちにエミさんはグラスを二個引っ張り出してき
た、どうやら拒否権はないらしい。

まだ日も高いうちから呑んだくれるとは女としてどうかと思うけ
ど、まあ今更かと思つて彼女の酌に付き合うことにした。

の、だが。

「んうう……」

「……ええー」

十数分後にはすつかり潰れて、私にもたれかかってくるエミさんの
姿があった。

確かにお酒には弱かったが、グラス2杯程度でここまでベロンベロ
ンになる程弱かっただろうか……

「つて、これ度数高いですね」

ちびちび飲みながらボトルを見てみると、なんと度数が14%もある。

飲み応えがあると思ったら道理で。

私の方もまだ一杯と少しだけなのに頭がクラクラとしてきたのを感じる。

「これ以上は……やめておきますか」

飲むと言い出した本人が寝てしまっているのだし、1人だけで続行するということも虚しいので、ワインボトルに栓をして、エミさんの頭を自分の膝に乗せた。

しばらくはこの役得を堪能しよう。

「……んへへー、ゆかりさん」

「どうしましたかー?」

「すきー」

グサツときた。

普段とはまるで違うとろけたような笑みを浮かべながらそんなことを唐突に言われて私は思わずのけぞった。

この装填手、可愛すぎるっ。

「ゆかりさんはあったかいねー」

「ちよ、ちよつとエミさん……」

そんなことをしているうちにエミさんは器用に体を振ってお腹に鼻を押しつけてきた。

そのまますすんと匂いを嗅がれると、異様なほどに恥ずかしい。

なるほど、彼女はさつきこんな気分だったのか、悪いことをしたかもしれない。

「えへへへー」

「まったくもう……」

ふり落とす気にもなれないので、ゆるい笑い声をあげる彼女の頭を撫でてあげることにした。

つやつやとしたハリのある髪を指先で梳かすと、その触り心地に思わず頬が緩んでしまう。

私だけが知ってる、エミさんの触り心地。

「……ずっと、こんな日が続けばいいですね」

すやすやと寝息を立て始めた彼女の横顔を見ながら、そんなことをつぶやく。

願わくば、こんな幸せがいつまでも続きますように。

ゆかエミif 2

静かな電子音だけが鳴り響く部屋の中。

真っ白なベッドの上に、1人の少女が横たわっている。

真っ白い髪に血の気の失せた紙のような肌色。

一目で見ても明らかに生気の失せた様子を伺える。

ぼんやりと開いた瞳は、虚空を眺めるばかり。

しかし、その右手だけは確かな意志のもとに、自分の手を包む誰かの両手を握り返している。

「……お医者さん」

「……はい、なんででしょうか」

「優花里さんと、2人きりにしてもらえますか？」

「ええ、わかりました。失礼します……」

白衣をまとった医者は、頭を下げてから静かに部屋の外へと出ていった。

残っているのは、白い少女と、傍に寄り添う女性だけ。

「……へへ、2人つきりだね」

「はい。そうですね、エミさん」

嬉しそうに微笑む少女とは裏腹に、女性、秋山優花里の表情は曇つたものだった。

まもなく、目の前の少女、エミの命の灯火は消える。

その最後の瞬間を看取ろうというのだ、浮かばれるはずもなかった。

「優花里、さん……おかしいなあ、たくさん話したいことがあるんだけど、いざとなると何から、話せばいいのかな」

「いいんですよ、ゆっくり少しづつ話してください」

「それだと間に合わないかもしれないからね」

「っ」

言葉に詰まって、優花里はキュツと少しだけ力を込めて、エミの手を握った。

弱々しく握ってくる感触が、先ほどよりも、弱い。

「じゃあ、まずはありがとうって言おうかな。　ありがとう、優花里さん。　君のおかげで私は、自分が誰かを愛するってことの、重大さを知ることができた」

「重大さ……」

「うん、重大さ。　難しくて、とても表現しにくいけれど、見てることと触れることはこんなにも違うんだって……どちらが良いのかはわからないけれど、でも、これはすごく暖かくて、恥ずかしくて、幸せなものだったんだ」

だから、ありがとう。

その言葉が切なくて、胸が締め付けられて、瞳が潤む。

「そして、次に……ごめんなさい。　私は、あなたを置いて、逝ってしまう。　優花里さんを置いて、勝手に消えてしまう。　そのことがとても悲しくて、つらい。　ごめんなさい」

零れた涙が頬を伝って、ベッドを濡らす。

痛いほどに手を握ってしまっただけでも彼女は何も言わず、ただ微笑むばかり。

「エミさん……っ」

「……優花里さん」

名前を呼ばれるだけでこの上なく切ない、苦しい、辛い。
今すぐこの場から逃げ出してしまいたい。
でも、ずっとここにいたい。

分裂した思考が脳髓を焦がす。

避けようのない恐怖が、絶望がすぐそばまで迫っている。

嗚呼、どうか、今この瞬間で永遠に時が止まってほしい。

時計の針を止めて、この死を永遠にないものにして欲しい。

願いが通ずることはないかわかっている、そう思ってしまう。

「……優花里さん、それとね、私は貴女にひどいことを言いたいの」
「え……」

不意にそんなことを言われて優花里が顔を上げると、苦しそうな表情をしたエミが、こちらをまっすぐに見ていた。

「優花里さん……私が持っていた、家の鍵……それと一緒に束ねてあ

る小さな鍵はね、私の机の鍵の引き出しを開けられるんだ。その中にあるものを、君に見てほしい」

「そこに、何が……」

「それで、気に入らなかつたら、それを捨ててほしい。いや、むしろその方が……安心するかもしれない。あれは、醜いものだ……私のエゴの産物だ……だから、受け取るかどうかは、よく考えてほしいんだ」

「……わかり、ました」

何をいつているかは、よくわからない。

ただ、それでも、とても大切なことを言っているとわかった。

だから、エミの瞳を見つめ返しながら、優花里はしっかりと頷いた。

「……それとね、もう、ひとつ……私と、その、あの」

「なんですか?」

「……キスを、一つ」

その言葉だけ、少し恥ずかしそうに頬を染めていうものだから、優花里は少しだけ笑った。

椅子から立ち、腰をかがめて、その白い少女の唇に、そっとキスを落とす。

鈍い動きで食んでくる動きに、優しく答えながら、長い、長い口づけを交わす。

「……ふは」

「ふあ……」

永遠にも感じられる愛しい時間は、静かに終わりを告げた。

そつと唇を離すと、潤んだ瞳で見上げてくるエミがいる。

たまらなく愛おしくて、その体をそつと掻き抱いた。

「……優花里さんはあつたかいなあ」

「貴女も、暖かいです」

「えへへ……」

エミの細い両手もまた、優花里の体をそつと抱いた。

弱々しい心臓の鼓動が優花里の体に伝わり、溶けていく。

今、こうして生きている。

彼女は生きていて、そしてもうすぐ――

「……死にたくないなあ」

ポツリと、そんな言葉が皮切りだった。

「……優花里さん、私怖いよ……死にたくないよお」

「エミさん……」

「まだ、私……やりたいことが、たくさんあったんだ……優花里さんと、もつとたくさん美味しいご飯食べたり、外国に旅行したり……戦車だつて、まだ貴女と一緒に戦いたかつた……」

優花里は、エミが弱音を吐いたのを始めて見たかもしれない。

エミの体が静かに震えて、その飴色の瞳から涙が溢れ出していく。

「まだつ……まだ優花里さんと、一緒にいたかつた……やだ、死にたくない、優花里さんと離れたくない……！　貴女を幸せにしてあげた……！　私何もできてない……！……」

「エミさん……」

「こんな、嘘まみれの私を好きになってくれて、だから、たくさん恩返ししたくて……やだよ、死にたくない、死にたくない……！……」

「エ、ミヤ……」

「死にたくない、死にたくない、優花里さんから離れたくない！」

か細い声で力一杯叫びながら優花里の体を抱きしめて、幼子のようにくずる。

堪らなくなつて、優花里もエミの頭を胸に抱いて祈る。

神様がいるのなら、どうか。

どうか奇跡を。

彼女と私を離れ離れにしないでください。

「……ごめんなさい、最後の最後に見苦しくて」

「……」

「……秋山優花里殿、幸せになってくれ」

「……」

「エミさん」

「エミさん」

「エミさん」

慎ましやかなお葬式になるはずだったのに、随分と大ごとになってしまった。

大きいため息をついた優花里はぐったりとテーブルにもたれかかり、だらしなく手足を伸ばした。

「エミさんは交友関係が広すぎます」

少しだけむすつとした愚痴を吐いて、そして優花里は目を閉じた。あれから目が回るような忙しさだった。

身寄りがなかった彼女の葬式は自分が主導でやらざるを得ず、父や母、チームメイトたちの力も借りてなんとか無事に開くことができた。

知り合いだけを招いて静かに終わらせる予定だったのだが、黒森峰にいた頃の仲の良かったメンバーだとか、忘れもしない、あの大洗学園艦の命運をかけた戦車道全国大会で戦った相手たちに、大学選抜との戦いで集ってくれた戦友たち、なぜか島田や西住の一家など。

それ以外にも、etc. etc. …あまりにも多くの人数が集まっ
てしまい、悲しみに暮れる暇もなかった。

誰もが皆一様に、彼女の死を嘆き、悲しんだ。

特に彼女とは親友と言つていい間柄だったみほやエリカ、それにライバルとして知られていたダージリンともなるとそれはそれは……

自分が慰める役になるとは思ってもいなくて、優花里は少しだけ苦笑した。

しかし、その嵐が去って一人きりになると、否応無く実感してしまう。

2人で暮らしていたこの小さな家に、今はもう、1人しかいないことを。

「……家の片付けも、しなくちゃ」

そうは言っておきながら、優花里はエミの私物を整理する気にはならなかった。

なんとなく、手を出したくないと思った。

それをしてしまったら、自分が彼女はもういないことを認めることになってしまう。

今だに彼女の死という現実を受け入れていない自分が滑稽で、嘲笑するような笑いが漏れてしまう。

それがきつかけというわけでもないが、優花里はふと死に際に言われたセリフを思い出した。

「そうだ、机の……」

エミの遺言、エミの持っていた鍵束の一つ、小さな鍵で開く鍵付きの引き出しの中身。

それをやり遂げなければならない。

そうおもった優花里はゆったりと立ち上がると、気だるげな足取りで部屋へと向かう。

懐を弄れば、チャリンと音を立てて鍵束が引っ張り出された。

「これ、ですね」

エミが使っていた小さな作業机、その仲の、一番上の段の鍵付きの引き出し。

そつと鍵を差し込んでひねる。

あっけなく引き出しの錠は解除された。

(中に、何が)

エミが最後に自分に託そうとしたもの、それがなんなのか。

まるで予想がつかないまま、優花里はそつと、その引き出しを引い

た。

中には、小さな箱と、一枚のカードが入っていた。黒くて手触りのいい布に覆われた小箱を、そつと手にとって開いてみる。

中には、小さくとも神々しくきらめくダイヤモンドと、真つ白なパールがあしらわれた銀の指輪が収まっていた。

「これ……」

言葉が、出なかった。

いつの間にこんなものを用意していたのだろうか。

これを自分に渡すとは、つまり、これは。

優花里は、もう一つテーブルに収まっていたカードを手にとった。

真つ白いカードの片面は真つ白で、もう片方には宝石言葉と、一言だけ。

『ダイヤモンド・永遠の絆』

パール・貴女の誕生石

私が貴女の伴侶となることを許してくださいるのなら、私が貴女と永遠の愛を誓うことを許してくれるのなら、どうかそれを受け取ってください。

天翔 エミ』

「う、あ」

涙がこぼれでた。

もう一生分泣いたと思っていたのに、それでも堪えられなかった。膝から崩れ落ちて、そつとその小箱とカードを胸に抱く。

「なんで、なんで……いまなん、ですか……!!」

きっと、エミは優花里を死にゆく自分に縛り付けるのが嫌だったんだろう。

だからこの指輪を送るのをためらって、でも、どうしてもこれを渡したくて、だから死に際にあんな言葉を言ったのだ。

これを受け取らず、新しい幸せを追い求めてほしい。でも、もし

受け取ってくれるなら……そんな、淡い希望を込めて。

「生きているときに、渡してくださいよ……!!」

優花里は初めて、エミの優しさを恨んだ。

そんなことをするくらいなら、生きている時にその愛を誓って欲しかった。

自分が断るわけがないのだから、だからこそ貴女の言葉と共にこれを贈って欲しかった。

優花里は泣いた。 延々と泣いて、エミの悪口を散々言った。

そして、涙が枯れて、泣きつかれて、ようやく静かになった時。

優花里はそっと、小箱の中の指輪を取り出して――

自分の左手の、薬指に差し込んだ。

「……永遠の愛を、貴女に誓います。 ずっと、ずっと一緒です、天翔エミさん」

人知れず、その指輪にそっと口づけを落として、世界一悲しい婚姻の誓いは終わった。

そして、その数年後。

世界大会に出場したとあるチームの装填手が、世界最速の装填速度を叩き出して多くの人々を仰天させることとなる。

その力の源は何かを問われた時に、その選手はこう言いつた。

「最高の装填手の教えのおかげです」

そう言った彼女の左手には、まばゆく輝くリングがはまっていた。

ノンナとエミーリヤ、カチューシャ

「エミーリヤって、意外と料理ができるのよね」

或る日突然そんなことを呟いたカチューシャに、私は視線を向けた。

机に頬杖をつきながら眠そうにウトウトし始めたので毛布でもかけようと立ち上がりかけていた足が止まる。

「料理、ですか？」

「そう。特別美味しくはないけど、作るのが早くてレパートリーが広いのよ」

「はあ……」

急にそんな話題を出されてどう反応すればいいのかわからず、曖昧に相槌を打つ。

カチューシャもふと思いついてなんとなく口にしただけのようだ。

そのまま再び船を漕ぎ始めたので、今度はしっかりと毛布をかぶせてあげる。

すぐに眠り込んだカチューシャを見て昼休みの開始を告げる。

いつもの作業を開始するなか、私はふと頭の片隅で、同志エミーリヤの作る料理とはどんなものだろうと想像していた。

「で……家に来たんですか？」

「はい。気になったので、つい」

「まあ別にいいですけど……」

1日の学業を終えた私は、その足でスーパーマーケットへと立ち寄り、食材を買い込んだ後に同志エミーリヤの家を訪ねていた。

一応電話で了承は得ていたが目的は告げていなかったもので、家に上がらせてもらってからその旨を告げる。

彼女は困惑している様子だった。

無理もない、いささか唐突にすぎる申し出だろう。

しかし、好奇心を止めることができなかつたのだ。

カチューシャよりも小柄な彼女が台所に立ち手早く調理をする姿が気になって仕方がなかつたのだ。

あの背丈では台所に立っても踏み台がなければ調理はままならな
いだろうし、いったいどんなふう料理をするのだろうか。

「材料はこちらに、一応三人分用意してあります。これを差し上げ
ますのでビーフストロガノフを作っていましたただけですか？」

「つ、作れるけどまた地味に難しいものを……ところでなぜ三人分？」

「カチューシャが今急に訪れた時に困らないようにと」

「アハハハ……まあ、わかりました、作りましょう。 少
しお時間頂
きますけど」

「もちろん構いません」

「ではちやっちゃと仕込んでいますね」

そう言つて、エミリーヤはすくりと立ち上がると台所へと向かつて
いく。

リビングとキッチンには扉で仕切られているが、半開きになつた扉か
らこつそりと観察すると、彼女は子供用のエプロンを取り出して身に
つけると、台所の隅に固まっていたブロックをいくつか連れね、横長
の踏み台を作り出した。

(なるほど、あれで……)

やや足場は不安定だが彼女ほどのバランス感覚なら問題はないだ
ろう。

あれに乗つて背丈の低さを補うというわけだ。

ビニール袋から材料を取り出した彼女は、それらをざつと眺めた後
に首を傾げて携帯をいじりだす。

そういえば、彼女に渡した材料にはルーが入っていない。

あれを作り慣れていない人間にソースも1から作れというのはい
ささか酷だつたか。

しかし彼女は少し携帯とにらめっこした後材料を手に取り調理
を開始した。

玉ねぎの皮を剥いてから、包丁でそれを半月切りにしていく。

——早い!!

玉ねぎ丸々一個を15秒ほどであつという間に処理してしまった。その後、ブロックの牛ヒレ肉もあつという間に切り終えてしまう。その後の調理もとにかく手際がいい。量を作るのに慣れているのだろうか。

その手際を見つめていれば、あつという間に台所から良い香りが漂ってきた。

「よし、あとは……ノンナさんなにしてるんですか？」

「ギクッ」

「いやギクって……口に出しますか」

今の今までキッチンに向かっていた彼女が急にこちらに目を向けたので、覗いていたのが見つかってしまった。

そそくさと退散し、テーブルの前に座る。

いささか以上の気まずさに、変な助平心を出すんではないなと思った。

「はいできました、ビーフストロガノフです」

「早い……」

さらにたつぷりのビーフストロガノフを見て、私は思わず呟いた。本当に。パッと作ってしまった。

作り慣れた自分でももう少し時間がかかりそうなものだが。

おまけにサフランライスも添えられて、そして当然のように隣にはコーヒーが。

本当にあつという間だった。

「それでは頂いちゃいませうか」

「あ、はい。いただきます」

「召し上がれ」

スプーンを手にとった彼女に倣い、私も銀匙を握る。

皿に盛られた煮込まれた肉はいかにも美味しそうに照り照りなので、これは期待できそうだ。

一口すくって、口に運んでみた。

……

……………

うん……

「あ、まずいですか」

「いえ、決してそんなことは」

反射的に取り繕った。

そうだ、決してまずくはない。

だが、自分で作った方が美味しいのも確かだ。

なんというか、味が薄いしやや肉が固い。

そういえばカチューシャは、特別美味しくはないとも言っていた。
なるほど……確かにこれは、特筆するほどの味ではない。

いかにも家庭料理といった塩梅の味だ。

というかそもそも作り慣れていない料理をいきなり上手に作れるものなどいないだろう。

だが流石にその感想を口にするような暴挙は犯さない。

いきなり押しかけて作らせて普通だなどと感想を述べるなんて失礼にもほどがある。

それに、この小さな同志が作ってくれた料理なのだからそれだけで
もただ美味しいだけのそれより数倍は価値があるのではないか。

というわけで私はそのまずくはないビーフストロガノフを黙々と
処理して、角砂糖をいくつか入れたコーヒーを飲み干した。

相変わらずこのコーヒーは、美味しい。

「ご馳走様でした」

「お粗末様でした。美味しくはなかったでしょう」

「いえ、そんなことは」

「顔に書いてあります。ていうか私料理得意じゃないし、美味し
いって言われたら逆に困惑するとかいうか」

「……」

見透かされていたようだ。

申し訳なさがこみ上げてくる。

そんなにわかりやすい反応だっただろうか。

いや、本当にまずはなかつたのだが。

「そうですね、正直、普通と違ったところでした」

「まあそうでしようね、私そういうの無頓着だから。一応ノンナさんに食べさせるものでしたしそれなりに気を使っただけです、普段はもつと酷いですよ」

「……妙ですね、手際はあんなにいいのに、なぜ味付けや煮込み加減に關しては、その」

「お粗末か、でしょ？ 私がバカ舌なのと、いい加減な性格だからさ。

あと、そういうのは昔から他の担当だったからね」

「他……？」

「コーヒーのおかわりを差し出されて、私はそれを受け取る。

ややぬるいカップが心地よい。

「孤児院ではみんな家事の手伝いをするんだけどさ、私は食材切るのが得意だったからそればっかやってたんだ。チビどもに包丁は危ないし年上連中は味付けの具合とかを担当すんの。だからかなー、下処理は得意だけどその後のことはどうも。一人暮らし始めてからは自分以外食することもないからまあいいかってなっちゃって」

「……」

「……どうしました？」

「いえ、別に」

「？」

あつさりと語られた過去に言葉が詰まる。

孤児院出身であるとは聞いたことがなかった。

本人が気にしていなくとも、他人がそうやすやすと踏み込める領域ではないだろう。

「コーヒーを啜る。」

「少し、酸味が強い。」

「まあ、これでわかりましたか？ カチューシャの言うように私は早く作れますが別に美味しくはないです。ご満足いただけただけでしょうか」

「ええ、よくわかりました。今日はわがままにお付き合いただき

感謝します。Большое спасибо」

「Пожалуйста」

ロシア語で返されたので目を丸くすると、クスクスと笑っている。どうやら一本取られたようだ。

「同志エミーリヤ、また、尋ねてもいいですか？」

「え？」

「まさかその一週間後にくるとは……」

「今日はカチューシャも来てあげたわよ！ ていうかノンナ！ エミーリヤのとこ行くのなら私にも言いなさいってば!!」

「Прошу прощения」

「日本語!!」

「申し訳ありませんカチューシャ」

後日、私はまたも材料を抱えて、今度はカチューシャと一緒に同志エミーリヤの家を訪ねていた。

目的はもちろん、彼女の料理。

「今日は私も手伝いますので、ボルシチを作りましたよ」

「ボルシチ」

「いいじゃない、でも美味しくなきや怒るわよ！ ノンナが手伝うなら大丈夫だろうけど」

「はいはい、わかったよカチューシャ」

返事が雑！ と怒るカチューシャをリビングに置いて、私と彼女がキッチンに立つ。

材料を取り出しキッチンに並べる。

「じゃあ私が材料切るから、ノンナさんは味付けとかを」

「いえ、エミーリヤ。私が切るので貴方がそちらを担当してください」

「え？ いやでも」

「いいから」

「はあ……」

やや強引に押し切って、私は包丁を手にしてエミーリヤは鍋の前に立つ。

材料を手頃なサイズに切りそろえてバットに入れて、それを彼女が鍋に放り込んでいく。

「カチューシャの口に入るのでから、美味しくしなければなりません、責任重大です」

「やっぱりノンナさんがやった方が……」

「いえ、貴方がやるべきです。はい、塩がやや薄いですね……」

頻繁に味見をしながら、彼女に味付けの具合をこと細かく指示していく。

やや不満げながらも彼女はそれに答えて、少し慎重すぎるくらいに味を整えていく。

「まあ、そうだよな、自分だけが口にするわけじゃないから……」

「ええ、そうです。……きつと役に立ちますよ。貴方もいつか、誰かのために料理をするようになるんですから」

「いやあ、私には縁がなさそうだけど」

「そんなことはありません」

私が結婚とかないわー、などとぼやく彼女を見て、少しだけ笑う。

そうだ。これからは毎週、カチューシャとともにここにきて、彼女の料理を食べよう。

そして、私は彼女に、料理を教えて、そして美味しいものを作れるようにしてあげよう。

プラウダを卒業してもずっと、三人で過ごす未来を夢想する。

そしてその未来で、私とエミーリヤが料理を作って、カチューシャにそれを食べてもらう。

一人ではなく、三人で過ごす素敵な未来予想図。

孤独とはかけ離れた、温かな日々。

そんな幸せな未来を、迎えられたらいいな。

味付けに四苦八苦する彼女の姿に微笑ましさを感じながら、私はポルシチを美味しく仕上げる技を伝授してあげるのだった。

エリカとエミ

「はいエリカ、これどうぞ」

「え？」

とある日の黒森峰学園艦。

1日の学業と戦車道の鍛錬が終わり、その日逸見エリカは友人である天翔エミと2人で帰路に着いていた。

その途中、突然カバンの中を漁ったと思えば、エミのその小さな手には主張しない程度の包装に包まれた箱がある。

「バレンタインデー、だろ？ 日頃エリカにはたくさんお世話になってるからね」

「え、あ、う」

差し出されたその箱と、同時にかけられた言葉に、エリカは言葉に詰まった。

実の所、同性からチョコを贈られるという経験はエリカは初めてではない。

他者にも自分にも厳しく常にストイックで、かつ容姿も優れたエリカは同性にも人気があり、何度かそういった贈り物や『手紙』を受け取ったことがある。

しかし、これは、どうだろう。

日が沈みかけた道すがら、自分が仄かな懸想を抱いている相手から、そんなものを、贈られて。

胸が甘い痛みを孕み、頬がカアツと暑くなるのを感じて、エリカは慌てて顔を背けた。

だがすぐにこの態度は良くないと思い、慌てて取り繕おうと言葉をひねり出す。

「そ、その……ありがと」

「ふふ、エリカは大げさだな」

クスクスと笑われてしまい、エリカは思わず歯噛みした。

もう少し、もう少し気の利いた言葉を言えないのかと自分の語彙力を詰る。

そうこうしているうちにエリカとエミは分かれ道にたどり着いてしまった。

このまま別れてしまつては挽回のチャンスを逃してしまう！

エリカは必死になつて頭を働かせる。

どうにか、どうにか先の失態をフォロウする方法はないか……！

「……エミ、今日はあなたの家に行つていい？」

「へ？」

茹だつた頭が出した結論はそれだつた。

エリカは穴があつたら入りたくなつた。

「まあ、適当なところにかけてよ。　コーヒー淹れてくる」

「ええ、お願い……」

相変わらず殺風景極まりないエミの部屋を見て、エリカは思わず眉をひそめた。

もう少し、部屋の内装に気を使つてもいいと思う。

机とテーブルとパイプベッドしかない部屋はもはや死刑囚の独房だ。

カーテンすらないとなると一種の美意識すら感じる。

座布団に座り込んだエリカはひとまず一息ついて、勢いでエミの部屋に上がり込んだがこの先どうすればいいのかを考えていた。

時間をおいて冷静になつたエリカは、とりあえず改めてしっかりとお礼を言おうと思つた。

おそらくエミからすればいわゆる友チョコ以上の意味ないだろうと、わかつてはいる。

だがそれでも、嬉しかった。

心が静かに湯立つような、暖かくて粘性の高い悦びが胸の内に張り付いているのを感じられた。

受け取つた箱を眺めていると、ニヤニヤと笑いがこぼれてしまいうなのを抑えるのが大変だつた。

だから、しつかり、心を込めてお礼を言いたい。

「はい、おまちどうさま」

「あつ、ありがとう」

気がつけば二つのカップを両手に持ったエミが、その一つを目の前においてくれた。

白い湯気に乗って、香ばしい香りが脳髄にまで染み渡る。

「砂糖は二個でよかったかな？」

「……ん、今日は砂糖はいいわ」

「あれ？そうかい？でも私はいれよう、普段より多めに」

「え？」

「ちゃぽん、ちゃぽん、ちゃぽんと。」

普段はブラックを好むエミがものすごい数の砂糖を投入してるのを見てエリカは目を疑った。

エミはもともと甘いものを好まなかったはず。

「意外そうな顔してるね」

「いや、だってあんた……」

「偉大なるガンマン曰く、寒い夜には大量の砂糖を投じたコーヒーとチョコレートで暖をとるべし。今の時期の海は、やはり寒いよ」

そういつてコーヒーに口につけたエミは、顔をしかめて額を抑えた。

「頭が痛くなるほど甘い」

「なによそれ」

甘いものを口に含んだのに渋い顔をする、矛盾に思わず笑いがこぼれてしまう。

そんなエミを尻目にエリカは早速エミからもらったチョコレートと包装を丁寧にはがし、そつと箱を開けた。

中に入っていたのは、しきりに区切られた可愛らしいチョコの詰め合わせだ。

「あれ……？」

「え、なに？」

「え、いや……手作りじゃないんだなって」

「そりゃ、私は手作りチョコなんてわざわざ作らないよ」

あつけらかんと言いつつエミに、エリカは安堵したような残念なような、不思議な感情を覚えた。

普段から何かと妙なところでこだわりを見せるこの小さな親友なら、こういう行事ではてつきり手作りチョコでも作ってくるかと思っただのに。

「だってさ、手作りチョコの大半って湯せんで溶かした市販のやつを型に流し込んだだけだろう？　そういうのって大半はまずいらしいじゃないか。　せつかくの贈り物、送った相手には美味しく食べて欲しい、なら市販のもので済ますべきだ。　手作りなんて見栄張るよりも、相手のことを思っただけの間違いのない品を。　違うかい？」

「……おっしやる通りね」

エミの言葉にエリカは苦笑し、チョコを一つつまんで口に放り込んだ。

キャラメルソースがかかっているらしい、香りが口の中に広がってなかなか美味しい。

あとを追うようにブラックコーヒーを一口。

芳醇な苦味とコクが、甘ったるいチョコレートと混ざり合う。

「うん、悪くないわ」

「それは良かった……うへえー、甘い」

「でも、型に流し込んだだけなのがダメなら、チョコトリュフとか作ればよかったんじゃない？　あとはほら、生チョコとか」

「私が料理苦手なバカ舌って知ってるだろう？　それともアレか、お気に召さなかった？」

「んーん、そんなことない。　……ありがとう、エミ。　すごく嬉しい」

スルリと自然に本音を伝えられて、エリカ自身が驚いた。

エミもまたぽかんと口を開けて、あのエリカが素直にお礼を言うなんて、などのたまうものだからエリカも怒る。

「なによその言い草は！」

「だってエリカいつもひねくれてるじゃないか。　隊長には素直なの

に」

「……隊長以外にだって素直よ」

特に貴女には、なんてことは言えず、拗ねたようにエリカはそっぽを向いた。

ごめんごめんと謝るエミは一息に砂糖のコーヒー和えを一気に飲み干して過去最高に情けない顔を晒す。

しばらくは甘いものはごめんだと吐き捨てた彼女を見て、ニヤリとエリカは笑った。

「ふーん、じゃあホワイトデーにお返しはいらなにかしら」

「む、まあくれないのなら仕方がないか」

「諦めるの早くない!？」

「だってくれないんだろ?」

「もう少しその、催促するとか!」

「くれるのかくれないのかどっちなんだよ」

「~~~~~! エミのバカ!」

「ふふ、なんだよそれ」

怒りをあらわにするエリカに参ったように笑うエミ。

しばらくじゃれ合ううちに、そんな揉め事も霧散して。

そのまま2人は、夜が更けるまで他愛もない話を交わして、そして今日は同じ屋根の下で眠りにつくだろう。

いつもの日常にたまにあるお泊まりの日、そしてそこに偶然重なった『恋人の日』。

いつもより甘くて優しい、1日だった。

これはエミとエリカがまだ中学三年生の頃の、2月14日の物語。

アンチヨビ地獄

「あのですねドゥーチェ、実は大切なお話があるんです」

「ん？ どうしたんだ改まって。何か悩みでもあるのか？ なんても話してくれていいぞー！」

「実は私アンツイオ卒業したら東北の方の大学に通おうと思ってます」

「なんで」

俺はみゆみゆを成せず敗北しました Special scena
ri o e x t r a E E E
????????????????????????????????

私は目の前の少女が言い放った言葉が到底信じられなくて、手に持っていた洗濯物のかかったハンガーをバサリと取り落とした。

手が震えて、膝が笑う。
この世のものとは思えない恐怖に苛まれて、意識が飛んでしまいうだ。

「エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、エ、今ななななんて」

「私は卒業したら東北の大学に進学しようと思ってます。ドゥーチェとは別の大学ですね、はい」

「あ、あ、あああああああああああああああああああああ」

あまりにも非常な言葉に、私は膝から崩れ落ちて、両手で顔を覆った、なみだがあふれてしまいそうだ、あふれた。

「どうして、どうしてそんなことを言うんだ……そんなことしたら、引っ越さなくちゃいけないんだぞ……一人暮らしになっちゃうんだぞ……？」

「黒森峰にいた頃は普通にそうしてましたし別に問題は」

「ある！ありありだ!!!」

「バーン！」とテーブルを叩いて私はエミに詰め寄った。

なんとかして、彼女を説得しなければならぬ！

彼女を一人で世間に放り出すなんて、そんなことはあつてはならないから！

「エミ、お前は……凄くちっちゃいんだぞ。そしたら色々不便も多いだろう。それにお前見た目相応の力しかないし、それで一人暮らしなんて無理がある」

「踏み台さえあればだいたいなんとかなりますよ。そもそもドウーチェが家にいない時は私は家事の類全部一人でこなしてましたから」
「むう、買物はどうするんだ！ というか、東北ということは生活に車が必要不可欠になってくるぞ！ 買物するのにも車がないと不便なんだ。エミの身長じゃ運転できないだろう！」

「知らないんですか？ 最近はスーパーなども体が不自由な人や高齢者の方向けに宅配サービスなんかやってるんですよ。大学にはまあ、自転車で行きます」

「こけたらどうする！ あんよに傷がついちやう！」

「あんよってあんた……徒歩でもこける時はこけるでしょう」

ああ言えばこう言うエミに思わずぐぬぬどうなってしまった。

まったく、いつの間にかこんな生意気に育ってしまったのだろう。

いいや、ここは一旦落ち着こう、アンツイオ生は狼狽えない。

一度深く深呼吸してエミの目を見据える。

紛れもなく、本気の日だった。

「……なあエミ、なんでそんなことを突然言い出したんだ？」

私はひとまず最大の疑問点を訪ねてみることにした。

なぜ、エミがそんなことを言い出したのか、まずはそれを明らかにする必要がある。

客観的に見ても、私とエミはうまくやっていたと思う。

それなのにこんなことを言い出して、間違いなく何か理由があるはずなんだ。

「……ドウーチェ、言わなきゃわかりませんかね」

「えっ」

「ドゥーチエが良かれと思つてやつてる、あの……さながら特殊なプレイつてレベルの接し方、ぶっちゃけ結構きついんですよ」

「うそだああああああ!! ていうか特殊なプレイとかいうな!!」

あまりの言い草に流石の私もショックを抑えられなかった。

嘘だ、良かれと思つて傷ついた彼女を癒すために思いつく限りの方法で甘やかしてきたのに、それが、全部全部重荷になって……?? 「あのですねドゥーチエ、いえアンチヨビ先輩。確かにあなたのやつていたセラピー……セラ、ピー……うん、まああの私に行っていたことは、一部の方々には大変喜ばれるでしょうし、高い効果を上げていたのは間違いありません」

「じゃ、じゃあなんで」

「単純に私がその手のアレに興味がないっていうか……」

「そ、そんな……! じゃ、じゃあ体を洗ってあげるのも、ミルクをあげたり子守唄歌つて寝かせつけたりお着替えさせたりトイレの手伝いするのも全部イヤイヤだった……のか……??」

「……ドゥーチエ、逆に聞きますけど。仮にあなたが私に同じよう

なことをされたと考えてみてください」

「え、私が、エミにそんなことをされる……??」

「……」

「何も問題なくないか?」

「ええ……??」

想像してみたけれど別に嫌ではなかった。

エミに哺乳瓶でミルクを飲まされたり、体を隅々まで洗われたり、お着替えの手伝いをされたり……

「うん、少し恥ずかしいけど……嫌じゃないぞ」

「うーん、参ったな想像以上に手強い」

「ていうか私は自分の嫌なことを人にしたりしない!」

「そうだったね……アンチヨビ先輩はそういう人だったね……根っからの善人だよね……」

いよいよエミは頭を抱え込んでしまった。
その様子を見ると、流石に胸が痛んだ。

冷静に考えてみれば、私が良くてもエミがいいとは限らないだろう。

それなのに無理に自慰行為にも等しい介護まがいの押し付けなど、本人が拒むなら、やめるべきだ。

エミはもう、私の手助けがなくても生きていけるんだろう。

「……うん、そうか、わかった。エミがいろいろ言ってるんだから、私も無理にやる必要はないもんな」

「よかった……わかってくれたんですね……あーほんとよかった……」

安堵のため息をつく姿に少しの寂しさと、そして大きな安心感を抱いていることに私は気がついていった。

(そうか……もうすっかり立ち直れたんだな)

もう、エミの心のうちに巣食っていたあのドス黒い感情は、表に出ることもないほど弱くなったか、あるいは綺麗さっぱり無くなってしまったんだろう。

もう、過去の辛い記憶を忘れて新しい人生をとっくに歩み始めていたのだ。

「……そっか、よかったな、エミ」

「え？ ああ、そうですね、ハイ」

「で、この問題が解決したということは、だ」

「え？」

「これでもう東北の大学なんて行く必要はなくなったよな？」

「ああい、それは行きますけど」

「なんで」

「いや、普通にそこで勉強したいことがあるので」

「……そっか」

「ええ……」

「うん、ならしやうがないかな……」

「はい……なんかすいません」
「いや……」

〜一年后〜

「うう寒い、こつちの冬は本当に寒いな……無事乗り切れるといいけど。 たーだいまっと」

「おかえりー」

「はいただい……ドウ、ドウドウドウドウドウドウドゥーチエ
なぜここに!? てか鍵は!?!?!?!?」

「うー、実は……エミとしばらく離れて生活して気がついたんだけど、
どうも私の方が離れられなくなっちゃったらしくて……」

「いや、鍵……」

「うん、だからこつちに編入した!」

「」

「突然押しかけて悪いがよろしくな!」

「……こふっ」

「え……?」

「?、」
Y
—
—
—
—
—
—
「?、」
—
—
—
—
—
—

— — — — —
「ノ． — — — — —
「ノ． — — — — —
」

r a p s y o u . H o w e v e r . t h e N e x u s t

Y o u s t a y i n t h e w o r l d
a s S o u l . f o r e v e r

「あ、おい、嘘だろ…起きろ、起きてくれ、エミ、エ
ミ——————————————————————
!!!」

プラウダのとある一日

「準備はいいですか？」

「大丈夫ですよ」

巨大な鋼鉄の獣の狭苦しい体内に、四人の女性が箱詰めになっていた。

そのうち一人はブリザードのノンナ、プラウダ高校の誇る名砲撃手であり、プロのスカウトからも注目されている選手だ。

そんな有望株である彼女の呼びかけに応じたのは、長身のノンナに対して異様なほどに背の低い小柄な少女。

黒く長い髪を後ろで束ね、分厚い防寒着を纏うその者の名を天翔エミ。

プラウダの支配者であるカチューシャに気に入られているとして知られ、そしてもう一つ、とある特徴によって上級生からも危険視されている。『ポリニヤのエミリーヤ』の二つ名で恐れられている。

そんな二人を含めた四人組の乗り込んだIS―2は、客観的に見て窮地に追い込まれていた。

高台から狙撃の役割をカチューシャに任じられたIS―2はその命令に従い事前調査にて目をつけていた高所に陣取ったのだが、そのとたん周囲に潜伏していた戦車4輜に包囲を敷かれてしまったのだ。「ここは向こうの地元ですから、事前にここに我々を配置するのを読んでいたのかもしれないね」

「本当にいいんですか？ 連絡を入れなくて」

「問題ありません」

通信手が不安げに尋ねるもノンナは気にするそぶりもなく静かに照準器を覗き込んだ。

「無駄に不安を煽る必要はありません、速やかに障害を排除し任務を遂行します」

「報告しなかったらそれはそれで後でカチューシャに怒られるかもしれませんね」

「……報告しないでおきましょう」

「怒りたいんですか？」

「……そんなことはありません」

「はあ、そうっすか」

「では……いきます」

ノンナがそう言った瞬間に、IS―2の外側で身のすくむような恐ろしい衝撃が炸裂した。

徹甲弾がわずかに狙いを外し近くに着弾したようだ、無論これは相手の攻撃。

操縦手が速やかに敵の攻撃方向に合わせて昼飯の角度を取る。

その旋回方向に合わせて砲塔も回転すると、瞬く間にIS―2の砲塔の切先が向かってくる戦車のうち1輛へと向けられる。

四方に展開したこれらを素早く減らす、ないし殲滅しなくては機動力の低い重戦車で近接戦闘を強いられ、少なくとも手痛い損傷は避けられないだろう。

背後を取られてしまえば機動力の差からして最悪の場合白旗死が上がる。

後ろは傾斜のきつい崖なので逃げ場もなく、ここを陣取られてしまえば狙撃ポイントを逆に奪い取られてしまう。

試合を左右しかねない重要な局面だ。

静かにノンナが息を吐いた。

群がってくる鋼鉄のハイエナのうち1輛に狙いを定める。

そして、主砲が放たれた。

真っ直ぐに飛翔したIS―2の徹甲榴弾の牙が、敵戦車の正面装甲を真っ向からぶち抜き致命傷を刻みこむ。

『グリズリー、行動不能！』

「右方向に旋回」

照準器の中で敵戦車が白旗をあげるのを確認したノンナはそれに喜ぶこともなく淡々と指示を告げる。

慌てて操縦手がそれに従い再びIS―2が大きく動く。

砲塔は素早く旋回し再び敵戦車を照準器内にとらえる。

しかし相手方に動揺は見られない。

——それも当然だ。

IS—2という高い火力に堅牢な装甲を持つ強力な重戦車は、しかし致命的といってもいい一つの欠点がある。

それは、弾の重さだ。

IS—2最大の武器である主砲、122mm砲はその凄まじい射程距離と火力の代償として、使用する弾頭が大型化することによる装弾数の減少に加え、一発につき25キロという桁外れの重さになってしまふという弱点を抱えていた。

当時の装填手たちの多くが苦しんだであろうこの専用弾では、どんなに手慣れたものであろうと一発につき十秒近くの装填時間を要するだろう。

そしてそれは多数対単機の戦いにおいては到底許容できない隙を生んでしまふ。

ゆえに、敵戦車たちはその隙に敵に接近しようともつすぐに突撃させる。

——その数秒後に再びIS—2の主砲が火を噴くまでは、だったが。

再び炸裂音が大気を揺るがし、その矛先を向けられていた戦車が着弾と同時に吹き飛ばされ、亀のようにごろりと倒れ臥す。

しばし時間が止まったように他の2輜は硬直し、

「はい装填完了」

「^マラ^ラ ^チエ^ッ ^ツ (素晴らしいです)」

再びIS—2の主砲が唸りを上げた。

呆然と立ち尽くしていた戦車の足元の地面を弾けさせた徹甲榴弾。崩れる地面に巻き込まれて大きく体勢を崩した敵戦車、無事なもう1輜は錯乱した様子で慌てて後退していく。

そうこうしているうちに再びIS—2の主砲が装填され、足をとられていた戦車の側面装甲を破碎し白旗を上げさせる。

「素晴らしい仕事です、同志エミリーヤ」

「これしか取り柄がないですから」

「謙遜を……残る1輜も速やかに撃破します、追ってください」

「了解しました」

操縦手が46tもの巨体を操りゆつくりとキヤタピラを駆動させる。

あまりの異常事態に錯乱しながら逃げ惑う最後の1輦を視界に捉えると、ノンナはあつという間に狙いを定めてしまった。

あとは、引き金を引くだけ。

逃げ惑う非力な逃亡兵に対し、無慈悲な鉄槌が撃ち放たれた。

『ノンナ！ そろそろ敵部隊が予定してたポイントに到達するわ、準備はいいわね？』

「……？ 敵は予想通りの行動をしているのですか？」

『そうだけど？』

「……さっきのシヨックでまともに無線もできなかつたりして」

「ありえそうですね……」

「あんな速度でIS-2が連射してきたらそりや驚くだろう」

「あなたが言いますか」

『ちよつとなに駄弁つてんの！ もっとしやんとなさい！』

「申し訳ありませんカチューシャ。では、敵部隊への攻撃を開始します」

『任せたわよ！ せっかくエミーリヤを貸してあげたんだから、5輦くらいはぶつとばしなさい！』

「ではあと1輦ですね」

『へ？』

「ふう……」

「お疲れ様です、ノンナさん」

「ええ、いえ、そちらこそ」

試合を終えて、すっかり熱がこもった車内から逃げるようにキューポラから顔を出すと、一足先に外へ出ていたエミが労いの言葉をかけてくる。

「体は大丈夫ですか？」

「え？　なんでですか」

「あれだけの重量のものをずっと持ち上げていたわけですから。今のうちにストレッチをしておかないと」

「まあそれはもちろん、でも普段はもつと重い物でトレーニングしますから」

平気な顔でそんなことを言うエミにノンナは思わず嘆息を漏らす。

まあ、ひとまずは戦車から降りよう。

火照った体を冷ますためにもノンナはキューポラから体を乗り出して、足を淵に乗せる。

しかし、踏み方が浅かったか、あるいは深かったか。

ずるりと、足元が崩れる感覚が襲う。

(あっ……)

やってしまった、とノンナは思った。

戦車の上でこけてしまうと、たいそう痛い目にあってしまう。

戦闘が終わったあと、俗に言うパンツァー・ハイが切れてしまった後というのは多くの人が油断してしまい普段は到底犯さないようなミスをしてしまうという。

普段では考えられないような装填速度に支えられてまさしく桁外れの戦果を叩き出したノンナは知らず知らずのうちにその状況に陥ってしまったてらしい。

(ああ、これは受け身をとれません……)

さながらスローモーションのように、転げ落ちた先にある硬質の戦車の装甲が迫ってくる。

慌てて突き出した腕も到底間に合いそうにない。

せっかく試合に勝ったのに、自分の不注意でそれにケチをつけてしまふとは……

のちに叩きつけられる痛みに備えて、ノンナはぎゅつと目を閉じた。

しかし、ぽすつと。

「大丈夫ですか？」

「……え、ああ、はい」

優しく何かに抱きとめられた感覚がして、目を開いてみれば小さな同志がノンナの長身の体を軽々と支えていた。

おろしますよ、と告げられてそつと鋼鉄の機体の上に降ろされると、ふわりとした浮遊感を引き剥がすように冷たい感触が体の熱を奪い取ってくる。

「……エミーリヤ」

「はい？ どうしました？ どこか痛いですか？」

「少し、手を握らせてください、思ったよりその、動揺しているみたいです」

「えっ………まあ、それなら、はい」

幾分かの躊躇の後、エミはそつとその手をノンナに差し出した。

その小さな手のひらにはめられたグローブをノンナは素早く取り外すと、両手でぎゅうつと包み込む。

「……あの、ノンナさんグローブを外す意味は」

「ごめんなさい、少しだけ、こうさせてください……」

「……あ、はい」

「……ありがとうございます、Ты моя жизнь」

そうしてしばらくの間、ノンナとエミはお互いの熱を確かめ合うように手をつなぎあっていた。

「……あの、同志エミーリヤ、私たちも降りて外の空気吸ってよかったですか？」

「え？ ああもちろんいいですよ。 ていうか、たすけて……」

「今日は二人のおかげで快勝だったわ！ ま、プラウダにかかればそれも当然ね！」

「光栄です、カチューシャ」

練習試合が終わりプラウダへと帰還した後、カチューシャはとてもご機嫌だった。

本日の練習試合の相手が試合の前から挑発行為を行っていたこ

とを根に持っていたのだろう。

それをぐうの音も出ないほどコテンパンにやっつけてしまったのだから機嫌がいいのも当然だった。

そもそも今回の試合相手の狙いは見え見えだった。

今年の大会で黒森峰を真つ向勝負で打ち負かし連覇を止めてみせたカチューシャを倒して、箔をつけたかったのだろう。

そのためにまずはプラウダの重鎮であるノンナを仕留める作戦を立てていたわけだ、裏目に出てしまったが。

相手の策略を全て踏みにじり実力の差で叩き潰す。

全てにおいて敵を圧倒するやり方はカチューシャの最も好むものである。

それらを完璧に成し遂げれたのだからご機嫌なのもいたしかたなしだ。

「それにしても9輜も撃破するなんて！ やっぱりIS-2に二人を載せてみる試みは成功だったわね！」

「流石です、カチューシャ」

「これだけの戦果をあげてくれたなら、今度からは二人を同じ戦車に乗せての運用を基本としたほうがいいかもしれないわ！」

「それはいい案かと。同志エミーリヤの力をお借りできるのであれば、今まで以上の戦果を上げることをお約束しましょう」

「あれ、私の意思是……まあ別にいいが。カチューシャ、コーヒーのおかわりはどうだ」

「もらうわー！」

エミがカップに二杯目のコーヒーを注いであげると、ノンナが少し非難するような目で見てきた。

カチューシャが眠れなくなったら困るということだろうか。

その辺りはカチューシャの自己責任ということと、子供扱いしないことに決めているエミとしてはどこ吹く風である。

そのままいつも通りにミルクと砂糖を入れてから練ってやる。

「さ、どうぞ」

「ありがとー！ んー、やっぱこれよね！」

「ノンナさんも、どうぞ」

「Спасибо」

差し出されたカップを受け取った二人は静かに口をつけて香ばしい香りと味を堪能する。

これであればマルメラードでもあれば完璧なのだが、今は夕食の間も近いので我慢することにした。

「んー……やっぱり美味しいわ」

「それはよかった」

「……」

「どうした？」

「んーん、なんでもないわ。……ねえエミーリヤ、次の練習試合ではやっぱり私の戦車に乗りなさい」

「あれ、さっきの話の流れからしてしばらくはノンナさんと一緒に乗って練度を高める感じじゃ」

「い、いいの！ 確かにノンナに貸してあげる時はあるけど、貴女は私の装填手なんだから！ 私の方をお粗末にしちゃ本末転倒でしょ！」

「いや、別にいいけどさ……やれやれ、相変わらず唯我独尊なこと、ゲホッ、コホッコホッ」

「煩い！ いちいち口答えしないの！」

真っ赤になつて突つかかる力チューシヤを適当にいなすエミーリヤを見て、ノンナは幸せそうに微笑んだ。

——このチームであれば、来年の全国も絶対に勝てるだろう

そんな確信を抱きながら、ノンナはコーヒーを口にはこぶ。

角砂糖が一つ入れられたほんのり苦い味わいは、ノンナの好きな味だった。

『願わくば、この罪深き子羊が 主のみもとに召されんことを……
アーメン』

サアサアと小雨の降る日の葬儀だった。

掘られた穴に入れられた棺桶が土に少しずつ埋められていくのを、
少ない参列者たちが見届けている。

その中の一人、『は、その光景になんの感慨も抱いてい
ないと言いたげな様子で、ただただ静かに事が済むのを眺めている。

『……さん』

そこは、一人の女性が声をかけた。

『が振り向けば、そこにいたのは』』にとつて

最悪の難敵、世間ではいわゆるライバルとして持ち上げられていた西
住みほが、喪服に身を包んで立っていた。

『……君か』

『さみしい、お葬式ですね』

『お姉さんと片割れはどうしたんだい』

『……まだ、気持ちの整理がついてないらしいので。 そのうち、一人
で来るそうです』

『そうか……』

自分から話しかけておきながら心ここに在らずといったようすの

『に、みほもかける言葉を思いつかず……そして無理に話
すこともないかと思ひ、しばらくは並んで棺桶が土で埋まっていくの
を眺めていた。

『……エミちゃんは、何か言っていましたか？』

『それに答えることに意味が見出せないな』

『最後にそばにいたのはあなただけだったでしょう』

『……』

『何か言ってたんですね』

追求してくるみほの視線に、『はしばらく目をそらして

無視を貫いていた。

だがいつまでたつてもみほが微動だにしないのを見て、こいつがこうなったらテコでも動かないと理解し、早々に諦めることにした。

「最後の最後まで謝り続けていたよ」

「謝る？」

「私に、君に、君のお姉さんに、片割れに……島田愛里寿にもその母親にも、西住の家元にもね」

「……」

「何に謝っていたかはわからない、なんで謝っていたのかも知らない。

ついぞ私は、エミのことを何も理解する事ができなかったね」

自嘲気味に嗤った』 『に、みほは何も言えずに俯いた。

やがて肩を震わせて涙をこぼし始めたのをよそに』 『は最後の瞬間を迎える前の彼女の姿を想起する。

実のところ、』 『は嘘をついている。

天翔エミがこの世から去る寸前に遺していた言葉はそれだけではなかった。

『生まれて来なきゃよかった……私のせいで全部こんなことになったんだ……生まれるべきではなかった……』

「……」

「うう……エミちゃん……エミちゃん……!!」

隣で泣き崩れる、一応はライバルとされている存在に、その遺言を聞かせる気にはならなかった。

単純に酷にすぎると思ったのもあるし、彼女をあそこまで追い詰めたのは他でもない自分だと思ったからだ。

あの慟哭は、きっと自分への罰だったのだろう。

であればそれは自分だけのものだ、他の誰にも任せてはならないし、任せる気にもならない。

結局は彼女が最後にようやく吐き出した澱んだ感情を独り占めし

たいという浅ましく醜い独占なのだ。

『ここにいる資格はない、そう感じた』

『は踵を返し、墓

地を立ち去った。

そしてその次の日、『

』が戦車道選手を引退することを告

げた。
世界の第一線で活躍する選手の電撃引退に戦車道界隈は騒然となり、様々なメディアが詳細を知ろうとするも足取り一つもつかむ事ができず

——1年も経つ頃には、すっかり忘れられていた。

その後、『』の姿を見たものは誰もいなかった。

「まあ、結論を言ってしまうえば私はなんのこともなく、こうして元の場所に戻っていただけなのだけれどね」

「ふーん……」

継続学園のちよつとした裏路地に、ひっそりと佇む小さな食堂がある。

数年ほど前までコーヒーが美味しくてゆったり出来る、穴場的なスポットとして生徒たちに親しまれていたのだが、ある日突然店は閉店してしまい、それ以降はたまに掃除に訪れるもの以外立ち寄らない廃墟同然の扱いを受けていた。

その店内、小綺麗に整えられたテーブルの上で紅茶の入ったカップを手に談笑をしている二人組。

一人はかつてこの学校で戦車道選手として活躍していた、アキ、と名乗っていたその人。

そしてもう一人は、現在この店に住み着き、ひっそりとカフェを経営している』
『、改めてミカだ。

「姿をくramsするのは得意だからね……昔と違ってお金もあった。ほとぼりが冷めるまで身を隠すくらいはわけはない」

「それでひっそりとこの古巣に戻ってきた、と」

「うん……情けない話、私はここから離れられなかった、離れたくなかったのさ」

「情けなくなんか、ないよ」

「さて、どうかな……」

微笑みながら紅茶を口にするミカの姿に、アキはどうしようもないほどの違和感を覚えてしまう。

高校の頃、天翔エミと出会って少したった頃から、ミカはずっと様子がおかしかった。

アキもエミとは仲が良く、ちよくちよくお菓子をこ馳走になったりする間柄なので二人の仲を最も近くで見ている存在だが、ついぞ二人がなぜ一緒に暮らし始めたのか、ミカが戦車道の運営に携わる者や委員会に対して攻撃的になったか、そしてそれをエミが憂いていたか……二人が、一体

どういう関係だったのかは最後まで知ることができず、エミは、死んでしまった。
言ってしまうえば、ミカをこうも歪めてしまったのは天翔エミなのだろう。

本人の望む望まぬにかかわらず、戦車道という競技の裏側に潜む薄汚い闇に対し戦いを挑んだミカに対して何も思わぬほど浅い仲ではなかった。

ボロボロに傷つきながらも尚、体一つで地位を確立していき、彼女は何を目標していたのか。

なんてことは、どうでも良くて。

「……ミカ、一人で大丈夫なの？」

「生きていくくらいはできるさ」

「そうじゃなくて……」

「大丈夫だよ、アキ。 私は大丈夫さ」

もう何も立ち入らせようとしない頑なな態度にアキは困ってしまった。

ただどうしようもなく、独りになってしまったミカが心配で訪ねたのに、自分はもう何もしてあげられないのだろうか。

冷めてもまだ美味しい紅茶を口にして、少し間を置いた。

「紅茶、入れるの上手になったよね」

「練習したからね」

「コーヒーは出さないの？エミちゃん、得意だったじゃない」

「……私に彼女のコーヒーの味は出せそうにない」

地雷か、と思うも落ち込む様子のないミカ。

こうまで会話のつかかりがないと、いつそ対戦車地雷でもいいから踏み抜いてしまいたい。

どうにかして彼女の本音を引きずり出して、会話の糸口を掴みたい。

居心地の悪い無言の時間に唸ってしまいそうになりながらも、アキは悪あがきするかのように店内を見渡す。

ふと、アキはミカが傍に置いてある分厚い本が目に入った。

角が擦り切れてボロボロのそれには、表紙にただ天翔エミと書かれているだけだ。

「それって、エミちゃんの……日記？」

「ん？ ああ、彼女の数少ない遺品さ。 本当は一緒に埋めた方がいいかと思っただけけど……悪いけど、手元に残しておきたくて」

そう言っただけの日記の表紙を撫でるミカの瞳がどろりと濁っていることに、アキは気がついた。

「彼女が抱えていた苦悩や嘆きか、ここには収まっている。 ついぞ私は彼女の苦しみを解きほどこいてあげることができなかった、だからこの日記には楽しいことや嬉しいことなんて全然書かれてない……でも、それでもこれは彼女の生きた証だから、それを忘れないように刻み込んで、せめて私が生きている間は、この世に彼女がいたということを覚えていてあげたい……」

私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は
私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は私は」

「っ、はあ、はあ、けほ、ミ、ミカ」

「出て行ってくれ、アキ……頼む」

「……」

「……はは、結局私は、何もできやしない……かつての友にまで、あの
仕打ちか」

「そうだな、エミ。君の気持ちが少しわかった。私は何もできや
しなかった、君を救えず、何も変えられず、成し遂げたいことは全て
手が届かなくて、救いたいものは全部こぼれ落ちて」

「棄てられたのも、納得だ、私は何もない、無能力者だ」

「生まれるべきではなかったのさ」

「……エミ、ごめんね。君のお願いすら守れないほど、私は弱かつ
た」

店内の小窓から吹き込んだ風が、テーブルから落ちた日記のページ
を捲り上げる。

パリりとめくれて開いたページには、震えた字でこう書かれてい
る。

『ミカさんが壊れていくのが辛い。神様、私がどうなっても構わな
いので、どうかミカさんだけは幸せにしてください』

再び風が吹き、そのページは閉じられてしまった。

落ちた日記を拾うものは
もう、いない。

雨の語らい

小さくて、細くて、でも微塵も揺らがない。

私より背の低い、なのに大人のようになくましいあなたを見ると、たまに頬が火照る時がある。

「雨は嫌いだ」

ある日そんなことをポツリと呟いた彼女に、思わず私は振り向いた。

いつもの活気を失われた、静かなIV号戦車の車内。

他4人のメンバーがやや遅れてから参加するとの知らせを受けて、一足早く車内に入っていた私に暖かい缶ココアを手土産に潜り込んできたのが天翔さんだった。

梅雨の時期の海は、結構に肌寒い。

ありがたくそれを頂戴した私は、みんなが来る前に軽く暖機運転でしようと思い、戦車のエンジンに火を入れた。

すっかり手慣れた操縦で車庫から飛び出し、天翔さんがキューポラから試運転に行くことを告げる声を聞きながら適当な目的地目掛けてキヤタピラを回転させる。

しばらくの間道なき道を走っていると、不意にそんな言葉を呟いたのを耳にしたのだ。

「嫌いか？ まあ、雨は鬱陶しいものな」

「冷えるから体調を崩しやすいし、洗濯物も乾きにくい。おまけに戦車の泥を落とすのがいつもより大変だ」

「そーだな……草原の方に走らせたのは失敗だったかも」

ガタンガタンと起伏の豊かな地形を揺れで感じ取りながら走る、走る、走る。

いつ頃メンバーが集結するかは分からないからそこまで遠くはいけないけれど、普段とはまるで違う、2人だけで走るのが妙に新鮮で、なんとなく遠くまで走りたくなってくる。

元々、口数が多くない組み合わせだ、会話は弾まない。

でも、こうやって静かなままなのも好きだから、苦ではなかった。

ただ、10分ほど走らせると流石にこれ以上はなられるのは憚られて、ギアをニュートラルに入れて停止させる。

寒いから、エンジンはつけっぱなしだ。

「ところで、天翔さんはなんで今日は差し入れをくれたんだ？」

「待たされて暇そうだったから、なんとなく」

「おせっかいめ」

「私がおせっかい焼きなのは、毎朝の通学で散々知っていると受け
れど」

「むむむ」

朝の低血圧がまだまだ改善されてない私は、通学路の長い長い道のりを、頻繁に彼女の助けを受けてなんとか通っている。

そど子に怪しまれない程度の頻度で曲がり角のあたりまではおぶってくれて、そのあともいい塩梅で手を引いてくれるから、今までよりずっと遅刻の回数は減った。

彼女に背負われて、適度に揺れているとだんだん体の調子も戻ってくるし、必然密着するので体温も高くなってくる。

その後の朝の調子が前よりずっと良くなったので、本当に彼女のおせっかいはありがたいものなのだ。

「こういう風に気遣われると、天翔さんがまるでお姉さんに見えてくるな」

「……………え？」

「たまに思うんだ、天翔さんはかなり大人びてるなって。 沙織も不

思議がってたぞ、どうしてあんなに大人っぽいのかって」

「……………さあ、なんでだろう」

「今、はぐらかされた気がするぞ」

「違うさ、露骨に話題を逸らしただけ」

「より酷いじゃないか」

軽くあしらわれてしまって、思わず軽く睨むけれど相変わらずその

幼い顔に余裕の笑いを浮かべているからなんだか気が抜けてしまった。

こうして軽くあしらわれることは珍しくない。

そしてそんな会話をすることを楽しいと感じている自分もいる。

(ん？ つまり私は天翔さんといれば静かでも話しててもどっちもいいということなんだろうか)

益体のないことを考えながら、残っていたココアを全て飲み干した。

やや冷え始めていたそれは中途半端なぬるさで喉の中を撫でながら胃の中へと流れていく。

「ココア」馳走様。でも、いつぞや飲んだ天翔さんのコーヒーの方が美味しかった」

「嬉しいことを言うね。また遊びに来るといい、みほも喜ぶぞ」

「天翔さんは？」

「もちろん歓迎だよ」

にこりと笑う彼女を見て、不意に頬が熱を持った。

「あくわかる、えみりんってなんだかお姉さんっぽいんだよね」

その次の日のこと。

いつものメンバーでIV号戦車に乗り込んで戦車を走らせていると、なんとなく私が振った話題に沙織が食いついたところだった。

「あく、なんだかわかりますね。いつも一歩引いた位置にいて、でも困ったことがあると助けてくれるので、とても頼りになります」

「相談すればいつも真摯に受け答えしてくれます！ 装填手としての心得もいくつも教えていただきました！」

「昔からエミちゃん世話焼きだからなあ……」

「いやあ、やつぱみぽりんがベタベタに惚れちゃうだけはある大人の余裕を感じちゃうよねー」

「ほ、惚れって……そんな。エミちゃんは友達だよ沙織さんっ」

やはりと言うか、他のメンバーも天翔さんには好意的だった。

西住さんと言う接点があるからか他チームのメンバーでありなが

ら天翔さんは私たちとの交流が深い。

それに力仕事に関して多大なる貢献をしてくれるので、その他の作業が苦手な私としては大変ありがたいことだ。

「私は特に世話になっただけだから、今度何かお礼でもしようと思ってる、お菓子とか」

「お菓子は麻子が喜ぶものじゃない……」

「？ 天翔さんはお菓子嫌いか？」

「積極的には食べないかな。お茶に誘えば一緒に食べてくれるけど、食事メニューとかすぐく気を使ってるから、自分から買うことは滅多にないよ」

「あー、やっぱりえみりんそう言うの気にするんだ。お肌ツヤツヤだもんね。 大事なのは生活習慣かー」

お菓子が嫌いな人類なんて考えたこともなかったけど、確かに天翔さんは食事にはかなり気を使っていた覚えがある。

お菓子を送ればいらぬ気苦労をさせるかもしれない。 そうなると、何がいいだろうか……

「コーヒー豆はいかがですか！ 天翔殿はコーヒーが大好きですからきつと喜びますよー！」

「日頃の感謝の気持ちなら、やはりお花がいいですよ」

「んー、えみりんの喜びそうなものかー。 みぽりん、何か思い当たるものない？」

「うーん、エミちゃんのお喜ぶもの……そもそも物欲らしいものを一度も見ることがないから……」

「仙人か何かか……??？」

花の女子高生としてあまりにも枯れすぎているチームメイトの話聞いててなんだか頭がくらくらしてきた。

軽い気持ちで日頃のお礼をしようとしてまさかここまで悩むことになるとは。

いつそのこと、お昼にお茶でも買ってあげようか。

いやいやそれは流石に……

「ん、まてよ……っ？」

「これは？」

「戦車道のこと以外にも、朝の通学路でお世話になってるから、そのお礼をしたかった」

紙袋に包んだそれを手渡すと、しばらくきよとんとした後に、彼女は柔らかに微笑んだ。

「そんな大袈裟なこととはしてないけれど……ありがとう、早速開けてみてもいいかな」

「もちろんだ」

そう言うと彼女は紙袋の中をそつと覗き込んだ。

プレゼントを目の前で見られるのは、少し、気恥ずかしい。

そう考えているうちに中身を取り出したらしく、手にしたそれをマジマジと見つめて、天翔さんはキョトンと首を傾げた。

「これは？」

「アロマキャンドルだ、使えばいい香りがする」

小さなガラスに詰まった乳白色のキャンドルを見て、彼女は物珍しそうにしばしばそれを眺めた。

「アロマキャンドルは、その小さな炎と香りにリラックス効果がある。

天翔さんにピツタリだ」

「えつと、どうしてかな？」

「雨の日に使うといい」

そう言うと、彼女の方がぴくりと震えた。

珍しい、反応だった。

踏み込むのは、やめておく

「なんで天翔さんが雨が嫌いかなんて、態々聞きはしない。ただ、雨で気分が沈んだ時は、それを使って気を楽しむといい、今は特に、梅雨だから」

「……そっか。 うん、ありがとう冷泉さん。 とても、とても嬉しいよ」

雨が嫌いと聞いて、彼女がなぜ雨が嫌いかなんて、理由を考えずともすぐ答えは思いつく。

それが、安直に踏み込んでいい領域ではないことも。だから、せめて少しでも楽になれる助けをしたい。

普段ずつと助けられてるんだから、これくらいは、いいだろう。

「うん、早速今夜使うよ」

「ああ、天翔さん。頑張れ」

そう言っつて、今日は別れた。

彼女は、本当に嬉しそうに、ありがとうと言ってくれた。

その事実を反芻して、笑顔を思い出して、その度に

胸がキュツとして、でもそれが、なんだかくせになりそうだった。

「えっ!? なにえみりんその怪我どうしたの!?!」

「やあ昨日料理の最中包丁取り落としちゃって」

「包丁取り落としてなんで顔を切るの!?!?!」

泥の一幕

「まいったな、こいつは……」

「まいりましたね、これは……」

ざあざああと、大雨が降り注いでいた。

まさしく天と地をひっくり返した、というほかないような土砂降りを前にして、大木の下にわずかにできた安全地帯に、2人の少女が身を潜めていた。

かたや、綺麗な金の髪を独特の髪型にまとめ、赤い聖グロのパンツアージャケツトを纏い、もう1人は艶やかな黒い髪を後ろでシンプルに結った非常に小柄な、幼女と言っても過言ではない黒森峰生徒だ。

2人がこの場所に雨宿りしているのは示し合わせたからでもなく単なる偶然だ。

練習試合の会場となる場所の視察係としての任を与えられた2人は、突如として降り出した大雨に慌てて雨宿りできる場所を探した結果、偶然にもばったり行き合ってしまった。

あまりにもできすぎた偶然になんとなく気まずい空気になった2人は、とりあえず携帯で迎えを頼んだ後に、なんととはなしに並んで立ち、黒い雲の立ち込める空を眺めていた。

「まったく……ただの現地調査の予定がこんなことになるなんて、あなた、疫病神がついてるのではなくて?」

「失礼なやつだな。それをいうなら例のあの人に付き纏われる原因作った君の方が疫病神そのものだろう」

「それは散々謝ったでしょう……」

ただただ待つのも暇なもので、どちらともなく話を切り出すと、思いの外雑談は弾んだ。

もともとひよんなことがきっかけで、黒森峰と聖グロの両方を巻き込む『ちよつとした』騒動の中心となつてしまった2人は、顔を合わせればついつい憎まれ口を叩き合ってしまう。

というよりは聖グロの方が深く根に持っていて、それを黒森峰の方があつさりとしらすものだからますます加熱してしまう、というよくない循環に陥っていた。

そのまましばし言い争いを続けていたが、不意に黒森峰の方がクチユンと小さくくしやみをした。

よく見てみれば、その肩は小さく震え、顔色も白く染まっている。それを見て聖グロの方も、随分と肌寒いことに気がついた。

季節は今は12月半ば、少し日が暮れば寒気はあつという間に大地を覆い、雨が降ろうものなら肌が泡立つほどの寒さが身を包む。

厚手のジャケットとグローブで守ってはいるものの、露出した首や顔は随分と冷たくなっていた。

(このままじゃ体調を崩しそうね……)

口喧嘩も取りやめて、ゴシゴシと腕を擦る。

迎えが来るまでは後10分はかかるだろう。

それまでずつとこの寒さに苛まれるかと思うと少し辟易とする。

しかし暖を取れるようなものなどあるわけもなく、諦観の念を抱くと同時に真つ白いため息を吐いた。

しかし、ふと、鼻をくすぐる香ばしい香り。

ちらりと目を向けてみると、黒森峰の方が何やら魔法瓶の中から白い湯気の立つ飲み物をカップに注いでいた。

「……あなた、それはまさか」

「ん？　珈琲だよ。冷えてきたから暖まろうと思ってさ。飲むか？」

差し出されたカップに、聖グロの方は思わず呻いた。

聖グロの生徒は、珈琲を飲まない。

冠名に紅茶の名をつける程度には徹底した紅茶至上主義が蔓延しており、その影響を強く受けた少女もまた、コーヒーに対して弱くない忌諱感を抱いた。

「だ、だれが、そんなもの……」

だが、しかし、どうだろう。

香ばしい香りと、温かそうに湯気をたたせるこの泥水コーヒーの魅力ときた

ら、それは初めて聖グロでいい茶葉を使って淹れてもらったそれに匹敵するほど、争い難く……

「飲まないのか？ ま、好きにするといいさ」

迷っているうちに黒森峰のは珈琲に口をつけてしまった。

おもわずあつと声が漏れると、チラリとこちらを見たのちにカップを差し出してくる。

「ほら、無理するな」

「……」

渋々、渋々ながらそれを受け取る。

両手で包み込んだカップはほんのり暖かくて、悴みかけた指先が少しづつほぐれていく。

（これは、仕方がなく、仕方がなく、なんです……）

聖グロ生徒として口をつけるべきではない泥水。

しかし、その暖かさと香りの誘惑は、争い難く……

結局その日、『ダージリン』は『天翔エミ』の珈琲に口をつけることとなった。

「それ以来ダージリンは何かにつけてはエミさんの珈琲を皮肉まじりに褒めては負けっぱなしなのが悔しくて彼女をぎやふんと言わせられるような紅茶を淹れる練習をはじめたの。そんな思いが最後の一滴の如く煮詰まった拳句淹れられるようになったのが今あなたに口をつけてるその紅茶よ、私たちの後輩ローズヒップ」

「アッサム!!!」バシィ

西住の母

茫然としてこちらを見上げる童に、手を差し伸べて、できるだけ優しく微笑みかける。

「今日から、あなたは私の娘になるのよ」

そう言ったとき、彼女の喉がキュツと締まったのを、今でも忘れることができない。

ゴクリ、ゴクリと喉を通っていくビールの冷たさに思わず目を瞑る。

現在の肩書はどうあれ、既に次期家元として為すべきことを全てこなした疲れ、それも丸ごと胃の腑に流し込むようにグラスを傾けると、数秒もしないうちに中身が空になったものだけが手の内に残された。

ちらり、と目配せをすると心得ていると言わんばかりに瓶を差し出してくる娘。

ありがとう、と言おうとしたのだが、思いの外疲労は大きかったのか言葉は喉を這い上がってこれず、覆い隠すように、再びコップいっぱいに注がれた黄金色を喉に流し込んでいく。

「……ふはっ」

「いい飲みっぷりですね」

「……なんだか今日は、飲みたい気分のようなわ」

自分のことなのに、他人事のように言ってしまうと、間抜けな感じがして少し気恥ずかしい。

クスクスと笑う娘を軽く睨むと、喉を鳴らすのはやめたもののニンマリと笑う目は隠しきっていない……いや、隠す気がないのだろう。

「まほさんが学園艦にのって、一週間ですか。よく耐えた方なのではっ。」

「何を言ってるの」

「しほさんが過保護気味なことはこの家にいるものならみんな知っていますよ。さ、こちらどうぞ」

「なによ……」

見透かすような瞳で、実際内心を言い当てられてしまつて。

恥ずかしさを顔を背けて隠しながら、差し出されたつまみの漬物に手をつける。

カリツと、いい歯応えだ。

「来年はみほも私も行つてしまいますけど、大丈夫ですか？」

「別に、問題はありません。たかだか数ヶ月離れるだけで心配になる程柔な鍛え方はしていませんから」

「まほさんはそうでしょう、でもしほさんはどうでしょうかね？」

「……あまりいじめないでちょうだい、エミ」

普段は物静かなくせに、からかう時は舌がよく回る義娘にそういうと、ニンマリとした笑いをいよいよ隠さなくなったエミは湯が沸くような静かな音で笑つた。

仲の良かった親戚、歳の近かつた彼が、夫婦揃つて通り魔に遭つたと聞いた時の感覚は今でも脳裏にこびりついている。

葬式の最中、遺された幼子が茫然と立ち尽くし、誰が引き取るか施設に預けるかなどと話し合っている中で我慢できずに彼女を引き取ると言ひ放つ。

常夫さんは一も二もなく同意してくれて、当時まだ幼かつた娘二人に挟まれるように、彼女を養子とした。

それが、今日の前でニコニコと微笑んでいる幼女だ。

「……子供が育つのは早いわね」

「ついこないだまで、まほさんも私と同じくらいの背丈でしたからね。」

それがあつという間に見上げるほどになりました」

「……同じ暮らしをさせたはずだけど、なぜあなただけそんなにちみっこいのかしらね」

「さあ？ 神のみぞ知るつてところですよ……わっ、ちよ、やめ、そんなぐりぐり撫でないでくださいよ」

今夜はやたらと口が立つらしいエミの頭をかいぐるように撫で回すと、わたわたと首を張って逃れようとする。

エミが本気を出せばこの程度の拘束など赤子の手をひねるようには解ける筈なのだが、抜け出す気配は見受けられない。

——これもまた、見透かされているのかも？

「もう少し髪の手入れに気を使いなさい、少しごわついているわよ」

「みほのようなことを言う……」

「親子ですから」

「知ってますとも」

トクトクトクと三杯目のビールが注がれる。

明日は珍しくなんの用事もなく大した案件もなかったはずだ。

少し程度の深酒なら、許されるだろう。

「そういうえばみほは？」

「今日は疲れていたらしく、泥のように眠ってますよ。まほさんが

行ってしまったから少し無理をしてるように感じます。しほさん

も気にかけてあげてくださいね」

「ええ。……貴方はどうなの？ まほが行ってしまいましたけど。

まほは貴方がまた無理な鍛錬を行わないかと気が気ではないようでしたよ？」

「まほさんに心配をかけるのは本意ではありませんから、加減してま

すよ」

「私も心配だわ。あなたはすぐに度を越したトレーニングをしたが

るから。見ていて気が気でないの、常夫さんも顔をしかめていたわ

よ」

「それは……申し訳ありません」

「それは……申し訳ありません」

苦言を呈すると、エミは申し訳なさそうに目を伏せた。

「でも、こうでもしないと皆さんに苦情がいつてしまいますから」

その言葉に、グツと言葉が詰まる。

同年代の平均的な体格を著しく下回り、また、車長としてのセンスに致命的に欠けているエミのことを快く思わない連中が多いことは

知っている。

西住の本家の娘として相応しくないのではないかと、遠回しに縁を切ることを催促されたこともある。

それらの戯言は全て一笑に付してきたが、私ではなく娘たちに、どこかエミ本人に矛先が向くこともある。

エミはそれを笑って受け流していると聞いたが、内心ではどう思っているのか、彼女があまりにも過酷な鍛錬を自分に課している事が関係ないとはいえないだろう。

ただ、元気に育ってほしいだけなのに。

「エミ、あまり自分を卑下する物言いはやめなさいな」

「すいません、そんなつもりはなかったのですが」

「言い訳無用」

グラスを置き、エミを見据える。

頭ひとつ分以上目線が低い彼女にはどうしても威圧的になってしまふ。

こちらを見上げてくる瞳に僅かな恐れと、罪悪感を抱いているのを見逃せない。

「あなたがどう思おうと、周りがなにを言おうと、私と常夫さんの子であることに変わりはないのですから……胸を張って、前を向きなさい。あなたが落ち込んでいてはまほが学園艦からシユトウー力を飛ばして駆けつけかねないのでですよ」

「……はい、肝に銘じます、しほさん」

そういつて深々と頭を下げるエミ。

それを、快く思っていない自分がいる。

彼女は、いつになったら私を、母と呼んでくれるのだろうか。

親子となったあの日から、彼女は決して、私を、家族を、その役柄で呼んでくれたことはない

「荷物ですか？」

「ええ、娘さんから。母の日の贈り物だと書いてありましたよ」
ある日のこと。

自宅にて書類仕事を片付けていると菊代が小さな箱を持ってきた。
母の日、と言われると、確かにそうだったと思い当たる。

毎年娘たちはなにかしら贈り物を用意してくれるので密かに楽しみにしていたのだが、今は三人とも学園艦に移っているのでどうにも実感が湧かなかったようだ。

「そうですか。では、後で見ますのでそこに置いてください」

「あら、すぐに見ないのでですか？」

「まだ仕事中です」

「ふふ、かしこまりました」

菊代は机の片隅に箱をそつと置くと、部屋を出て行った。

1分、2分……5分。

手をつけていた書類を片付けつつもサツと箱を手繰り寄せる。

品のいい飾りの真つ白い小さな箱、さして重さもないそれに、今なにも何も変えがたい大切なものが詰まっている。

内心少し、いやかなり中身が気になっていたのを必死に押し殺して誰にも見られることのないタイミングを測ったのだ、遠慮はすまい。

ドキドキと高鳴る鼓動、そつと小さな箱を開く。

「あら、これは」

中には小さなブローチが収まっていた。

愛らしい桃色の薔薇を模したそれはなんとも可愛らしい。

主張しすぎない色合いなのが嬉しいポイントだ。

「……………ふふ」

ニヤけた唇を押さえ込む。

全く、我が娘たちながらいいセンスをしている、これならよほどかしまった場以外ならスーツにつけて問題ないだろう。

と、そこで、箱の中に小さなカードも添えられていることに気がついた。

手に取ってみると、どうやら薔薇の花言葉が書いてあるらしい。

『ピンクの薔薇の花言葉は、暖かい心、気品、感謝』

「……」

しばらくの間、そのブローチを持って部屋をゴロゴロとした。

ふと気がつくときふすまの隙間から菊代が見ていた。

しぬ、しんだ、はずかしんだ。

「あら？」

夜も更けて、1日の疲れをすっかり風呂で流した後にはふと携帯を見ると、一件のメッセージがある。みほからだ。

「なにかしら……」

昔と比べて引つ込み思案なつたみほは、なんだか私に苦手意識があるらしく（信じたくないが）あまり自分から話しかけては来ない。

なので、珍しいそれがすこし嬉しくて、すぐにそれを開いてみる。

『贈り物は届いた？ 今回の贈り物は三人で買ったんだけど、選んだのはエミちゃんなんだよ。ピンクの薔薇って母の日に定番のお花なんだって！ 日頃の感謝を込めてって、すこしはずかしそうだったよ、ほら！』

母の日に 定番の お花

その言葉が脳内で反芻される。

そして、送られてきた写真には、頬を赤らめているエミの姿。

「ああ……私の娘可愛い」

私の娘が可愛すぎてつらい。

この喜びを共有すべく、夫の自室へと向かう。

今日は、気分よく眠れそうだ。

「そんなことも、あったわね」

在りし日の思い出に、思わず笑顔が溢れる。

今も身につけているブローチをそつと撫でると、彼女との思い出が次々と胸の内に蘇る。

最後の私物を箱に収めて、そつと蓋をする。

そのまま暫く、私はそこを動きたくなかった。

おもいノンナ

空から舞い落ちる純白が少しずつ地に積み重なっていく様を眺めていると、まるでこの世界が巨大な砂時計の中のように感じられる。

只々物理法則に従って落下する白雪は、しかしこの静謐な世界のかなで確かに秒針が刻まれていることを証明する数少ない存在だ。

結露した窓の外の世界とは隔絶された部屋の中は、ゴウゴウと熱を発するストーブのおかげで暖かい室温を保っている。

プラウダの冬、極寒に苛まれる学園艦の開かれた箱庭の上では、こうして暖かい部屋に籠りながら本でも読むのが最も賢い時間の過ごし方なのだ。

「よく寝ておられます」

静かな寝息を立てているプラウダの暴君の頭をそっと撫でながら、ノンナが呟いた。

絹糸のような金の髪は指に絡まってもするすると解けていく。

まるで天使の羽のような手触りに思わずため息をついていると、くぐもった咳が突如響き渡り、ノンナも思わずその手を止めた。

「大丈夫ですか？」

「ん、心配ないですよ。少しむせただけ」

小さく笑いながらそう返事したのは、長い黒髪を後ろで束ねた、極々小さな少女、『エミーリヤ』であった。

『ポリニヤのエミーリヤ』の二つ名を持つプラウダの精神的原動機、天翔エミが、突如として倒れ病院に運ばれた日のことは、ノンナの記憶に新しいことであった。

原因は、ストレス性の胃炎、それも重度のもの。

また、コーヒートの飲み過ぎも原因の一つに数えられると医者は言っていたが、それにしても血を吐くほどのものは珍しいと目を丸くしていた。

それ以来エミはコーヒートをピタリとやめて、食事も消化に負担のかからないものに切り替えて対応をしている。

しかし、それでもなおノンナは心配でならなかった。

あの日、談笑する最中で唐突に咳き込み始め、書類を丸ごと染め上げてしまうほどの吐血をした時の光景は半ばトラウマとなって脳裏に刻まれていた。

その時あげられた、カチューシャの悲鳴と共に。

「本当に大丈夫ですか？ 無理をしてはいけませんよ」

「いえ、本当の本当に大丈夫です。 多分これは乾燥かな……マスクでもしようかな」

そう言われて部屋の空気が乾き切っていることに、ノンナは気がついた。

冬とは湿度が低くなるものであるが、これではぐっすり眠っているカチューシャの体にも悪いかもしれない。

これでも加湿器を起動させているのだが、広い執務室を全てカバーするにはやや力不足だったようだ。

「そういうときは、これですよ」

エミはそういうと立ち上がり、隣の給湯室に入ったかと思うとすぐに出てきた。

手には水に満たされたヤカンを手をしている。

なるほど、古典的だがちょうどいい。

ストーブの上にヤカンが置かれると、滴っていた水滴が小気味いい音とともに一気に蒸発する。

そんな色気のないサウンドを聴きながら、ノンナは再び膝に寝転んでいるカチューシャの頭を優しく撫でつけた。

最近深い眠りに入ることが少なかったので、ノンナとしてもしっかりと睡眠をとってくれることは嬉しかった。

この分なら、今日の昼休みは随分と長引くことになりそうだ。

「今のうちに、やれることを片付けておいたほうが気が楽ですよ」
「そうですね……」

休まずペンをノートに走らせる勤勉な姿を見て、ノンナは思わずため息をついた。

エミーリヤの成績の程は、よく知っている。

学年内では半ばよりもやや上の位置を常にキープしているが、平日頃の努力からするとそれはやや低い位置に止まっていると常々考えられている。

本人は自頭が悪いからと自嘲の笑みを溢していたが、それは事実かもしれない、そうでないかもしれない。

それでも、決して妥協せず、自分のできる範囲で努力を怠らない小さな彼女の姿が、ノンナは大好きだった。

——同時に、堪らなく心配でもある。

「ですが、最近は少し根を詰めすぎていませんか？ やり過ぎは逆効果、適度な休憩は大事ですよ」

「ブドウ糖はしっかり摂取してるし、睡眠もしっかりとってますけど」「ちがう、そうじゃない」

どこの特殊部隊の訓練兵なのかとノンナは頭を抱えなくなった。

軟弱な人間は、嫌いだ。

だからといって己を虐めすぎるタイプも、ダメなのだ。

だから、こういう時にノンナが打てる手は一つだけだ。

「少し休憩いたしましょう。紅茶を入れますから一服しませんか？」

「……ノンナさんの入れるお茶なら、喜んで」

そういつて微笑んだエミがペンを置くのを見届けて満足げに頷いたノンナは、カチューシャの頭を膝からそっと下ろして、抱き抱えた体をベッドへと——執務室になぜベッドがあるかは置いて——寝かせ、給湯室の奥へと入る。

使う茶葉はクラスノダール産のいいやつだ。

本当は各国の紅茶を揃えているのだがダーズリンティーだけは絶対にエミーリヤに出してはいけないとカチューシャからキツク言いつけられている。

サモワールの中で濃く煮出した紅茶の香りはなんとも芳しく、嗅ぐだけでも心が満たされるようだ。

コーヒーの腕前はまだまだエミーリヤには及ばないが、こちらの方はいささか以上の自信がある。

「お待たせしました」

「ああ、ありがとうございます」

座って待っていたエミーリヤの前にカップを置くと、彼女は申し訳なさそうに頭を下げた。

気にしなくてもいいのに、と思う。

この執務室では、コーヒーはエミーリヤが、紅茶はノンナが煎れるのが暗黙の了解だった。

最近はコーヒーを飲む機会がなくなってしまったが、だからといって必然増えた紅茶を煎れる仕事が嫌ということは決してない。

美味しそうに飲んでくれる顔を見るのは、堪らなく嬉しいものだった。

ちびちびとカップを傾ける愛らしい姿に思わず口角が上がってしまふのを必死で堪えながら、ノンナはエミーリヤの傍の椅子に腰を下ろした。

驚いたような顔を尻目に開かれたノートに目をやると、今日習った授業の復習らしい内容がびっしりと書き込まれている。

勤勉さが現れている、いいノートだ。

「同志エミーリヤは、とてもよく勉強を頑張っておられます。どうでしょう、目指す大学でも決まりましたか？」

「いえ、まだです。　　というか、最近は大学に行くかどうか不明瞭でした」

「ダメです」

キツパリと言い放つノンナに、エミは目を丸くする。

「貴方には大学に必ず行ってもらいます。　　理由は深いいえませんが」

「ええ……」

実のところ深い理由があるわけではなかったが、ノンナはエミが大学に行かないという選択を許容するわけにはいかなかった。

なぜなら、カチューシャは進学する気満々だからだ。

カチューシャは間違いなくエミーリヤの進学を望むだろうし、なんなら自分だってそうあつて欲しいと思っている。

浅ましい話だが、一年間共に過ごしただけでありながら既に、ノンナは彼女が欠けてしまった人生を想像することができなくなっていた。

早い話、ゾツコンである、ベタ惚れともいう。

「上級生は絶対、逆らうことは許しませんよ」

「いつになく押しが強い……」

密かにドン引きしているエミを尻目に、ノンナはちらりとベッドに目を移す。

どうやらカチューシャはまだぐっすりと眠っている。

今の会話が、聞かれなくてよかった。

きつとカチューシャは、エミリーヤが進学しないという選択肢を考えていることに対し徹底的に反論してしまうだろうから。

少なくとも、今は、この静かな空間を乱されないことに、ノンナはほっと胸を撫で下ろした。

「それにしても、なぜ進学しないという奇妙なことを考えたのですか？」

「なんでって……まあ率直な話お金の問題です、孤児院に負担を与えているのは本意ではないし、稼ぐ手もないし」

「でしたら私が払いますよ」

「ダメに決まってるでしょなにいつてるんですか」

「え?」

「え?」

こうして、目が覚めたカチューシャも巻き込んでエミリーヤの卒業後の進路をめぐる大論争が勃発し——最終的に、カチューシャと一緒にロシアへ留学するという話にまで発展するのは、そのすぐ後のお話。